

劇作家、演出家というように「家」の文字が末尾につく仕事は、その職業で本当に家が建てられるようにならなければ名乗ってはいけないという話を聞いたことがある。

現在、日本では、劇作家という仕事だけで家を建てることは、なかなか難しい。第一、銀行が金を貸さないだろうから、住宅ローンが組めない。これでは、日本に本当の劇作家は、数えるほどしかないということになる。プロとアマチュアの違いは何ですかという質問もよく受ける。その仕事で食っている奴がプロというのが世間の通念だが、さて、これもどうだろう。

よほど有名な俳優さんでも演劇、舞台だけで食べていくのは至難の業だ。これは日本だけに限ったことではなく、ロンドンでも俳優の八割は、他のアルバイトをしていると聞く。ただ、彼の地では、演劇教育も盛んなので、途中で挫折をしても、中学や高校で演劇教師になるという道がある。では、日本の高校の美術教員は、美術のプロかと言えば、その答えは曖昧にならざるをえず、芸術におけるプロとは何かという問いかけは永遠の課題だ。生前一枚しか絵の売れなかったヴィンセント・ヴァン・ゴッホはプロの画家であったか？



絵・江口修平

プロということ

平田オリザ

こう見ていくと、家を建てられるかとはともかく、その道で食っているのがプロ、しかるべき収入を得ているのがプロという理屈も、相対的に乱暴だ。

たとえば相撲取りは、給与が貰えるのは十両以上のいわゆる閑取で、幕下以下は部屋で食事を提供してもらい、あとは親方から小遣いをもらって生活をしているのだと聞く。

しかし、幕下以下の力士がプロではないという人はいないだろう。ゴルフにおいても、トーナメントの賞金だけで暮らしているのはごく一部で、あとはみなレッスンプロやらないやら、なかなか大変な生活らしい。

スポーツも芸術も、才能のある者が集まって、さらに努力を重ね、厳しい淘汰を経て勝ち残った者だけが巨万の富を得る。

その栄光と成功を目指して切磋琢磨する若者たちを、目先の金銭の授受だけでプロだアマチュアだと語るのは浅はかだ。

人生をそれに賭けているかどうか。それ以外にプロとアマチュアを区分する術はなく、しかしその賭けは、特に芸術の場合には、他人からはなかなか理解されにくい。だから私は思う。

「自分をプロだと思ふ者はプロである」

ひらた・おりざ●劇作家・演出家。大阪大学コミュニケーションデザイン・センター教授。劇団「青年団」主宰、こまばアゴラ劇場芸術監督。1962年東京生まれ。95年『東京ノート』で第39回岸田國士戯曲賞受賞ほか受賞歴多数。フランスを中心に世界各国で作品が上演・出版されており、演劇ワークショップの方法論は中学国語教科書にも採用された。



撮影：青木司